

小中学校国語科書写から 高等学校芸術科書道への接続

大 池 茂 樹

1. はじめに

一般に広く世間で言われる習字教育は、小中学校においては国語教科の「書写」として、高等学校では芸術教科の一つ「書道」として扱われている。小中学校では、国語を表記するにあたって、文字を正しく整えて速く書くことが求められるものである。一方、高等学校では芸術として表現と鑑賞の能力を高めることが求められている。

そもそも、文字の読み書きは学校におけるすべての教科の基礎基本に置かれるものである。しかし、文字学習の機会は国語科に多く依存してきている。平仮名、片仮名、漢字の読み書きの学習は国語科の学習内容にうたわれているし、書くことに関しては書写という形で実際に手書きする学習活動を行うことになっている。

近年のパソコンやスマートフォンなどの急速な普及により、情報機器の使用が日常的となり、手で書くことの意義や価値観が大きく変化している。そのような中で、手で書くことの意義については、平成 22 年（2010 年）11 月「改定常用漢字表」の内閣告示にあたり、同年 6 月 7 日の文化審議会答申の「基本的な考え方」「1 情報化社会の進展と漢字政策の在り方」の「(4) 漢字を手書きすることの重要性」で「＜手で書くということは日本の文化としても極めて大切なものである＞という考え方を社会全体に普及していくことが重要である。」とあるように、その意義が確認されている。情報機器の発達により文字情報の取り扱いが便利なものとなったとしても、漢字ばかりでなく平仮名・片仮名などの手書き文字の読み書きは、文字文化としてその重要性は失われない

ものであると考えたい。また、筆文字による商標やタイトル文字などを日常的に見る機会が多い中で、書道芸術として、筆墨を使った表現やその鑑賞は、伝統的な文字文化を受け継ぐという点においても意義深いものであろう。漢字の学習と書写書道の学習は密接に結びついている。

新しい学習指導要領が平成 29 年（2017 年）3 月に告示された。小学校においては平成 32 年度（2020 年度）から、中学校においては平成 33 年度（2021 年度）から実施される。また、高等学校の学習指導要領は、この平成 30 年（2018 年）3 月に告示の予定である。

表題にも記した通り、ここでは小中学校国語科書写から高等学校芸術科書道（以下高校書道）へのスムーズな学習接続についての私見を述べようと思う。

2. 漢字の指導学習と書字の学習

国語科における漢字教育は、常用漢字表の漢字字体をふまえたものであり、小学生の段階では、小学校学習漢字に配当されている 1006 字（平成 29 年告示では 1026 字）の漢字を、おもに教科書体の活字により見て学習する。印刷文字としての漢字学習である。

平成 20 年告示の小学校学習指導要領（以下 20 年版小学校）では、[伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項] の中で漢字の学習については次のとおり、

ウ漢字の指導については、第 2 の内容に定めるほか、次のとおり取り扱うこと。

- (ア) 学年ごとに配当されている漢字は、児童の学習負担に配慮しつつ、必要に応じて、当該学年以前の学年又は当該学年以降の学年において指導することもできること。
- (イ) 当該学年より後の学年に配当されている漢字及びそれ以外の漢字については、振り仮名を付けるなど、児童の学習負担に配慮しつつ提示することができること。
- (ウ) 漢字の指導においては、学年別漢字配当表に示す漢字の字体を標準とすること。

とあり、学年配当漢字の柔軟な対応、字体への配慮が示されている。またその解説では、標準字体について、

(ウ) は、漢字の標準的な字体の拠り所を示している。漢字の指導の際には、学習指導要領の「学年別漢字配当表」に示された漢字の字体を標準として指導することを示している。しかし、この「標準」とは、字体に対する一つの手掛かりを示すものであり、これ以外を誤りとするものではない。児童の書く文字を評価する場合には、「常用漢字表」(昭和 56 年内閣告示)の「前書き」にある活字のデザイン上の差異、活字と筆写の楷書との関係なども考慮することが望ましい。

とある。標準字体についての活字と書写の楷書との関係を考慮することも示されていた。

次に、平成 29 年告示の新しい小学校学習指導要領(以下 29 年版小学校)では、「(1) [知識及び技能] に示す事項については、次のとおり取り扱うこと。(中略) エ 漢字の指導については、第 2 の内容に定めるほか、次のとおり取り扱うこと。」として、次の一文が加えられた。((ア) (イ) は平成 20 年告示と同じであるため略)

(ウ) 他教科等の学習において必要となる漢字については、当該教科等と関連付けて指導するなど、その確実な定着が図られるよう指導を工夫すること。

漢字の指導が「知識及び技能」の中で行われるようになるとともに、都道府県名などの漢字が社会科などの他教科での学習漢字にも取り入れられることとなった。また、

(エ) 漢字の指導においては、学年別漢字配当表に示す漢字の字体を標準とすること。

とあるのは現行の学習指導要領の(ウ)と変わりはない。しかし、以下 29 年版小学校解説では、平成 28 年 2 月 29 日の文化審議会国語分科会による「常用漢字表の字体・字形に関する指針」の報告を受け、

(エ) は、漢字の標準的な字体の拠り所を示している。

漢字の指導の際には、学習指導要領の「学年別漢字配当表」に示された漢字の字体を元に指導することを示している。「常用漢字表」(平成 22 年内閣告示)の「前書き」及び「常用漢字表の字体・字形に関する指針(報告)」(平成 28 年 2 月 29 日文化審議会国語分科会)においては、以下のような考え方が示されている。

・字体は骨組みであるため、ある一つの字体も、実際に書かれて具体的な字形となってあらわれたときには、その形は一定ではない。同じ文字として認識される範囲で、無数の形状を持ち得ることになる。

児童の書く文字を評価する場合には、こうした考え方を参考にして、正しい字体であることを前提とした上で、柔軟に評価することが望ましい。

一方、漢字の学習と書写の学習とを考えたとき、文字を書く能力を学習や生活に役立てるために、文字を正しく整えて書くことができるよう、指導の場面や状況に応じて一定の字形を元に学習や評価が行われる場合もある。指導に当たっては、字体についての考え方を十分理解した上で、生涯にわたる漢字学習の基礎を培うとともに、将来の社会生活において漢字を円滑に運用できる能力を身に付けていくことができるよう配慮することが重要である。

というように、字体字形についての柔軟な態度をもって対処することが示された。「漢字の円滑運用」という点で、漢字の運用力も培われるべきであろう。

3. 手書き文字としての書写学習

漢字の読み書き学習と、文字を整えて書く能力の育成のため、国語教科において、漢字の書字と書写は相互に関連付けながら学習を進めていかなければならない。20 年版小学校解説では、書写について次の説明がある。

書写に関する事項

この事項は、(1) ウの「文字に関する事項」の指導や、「B 書くこと」の領域の指導と緊密に関連する。文字のまとまった学習は、小学校入学を期に

始まる。文字を書く基礎となる「姿勢」，「筆記具の持ち方」，「点画や一文字の書き方」，「筆順」などの事項から，「文字の集まり（文字群）の書き方」に関する事項へ，さらに，「目的に応じた書き方」に関する事項へと系統的に指導し，日常生活や学習活動に生かすことのできる書写の能力を育成することが重要となる。

小学校の書写では、漢字は楷書を扱うのであるが、第3学年及び第4学年で「筆圧などに注意して書くこと」、また、第5学年及び第6学年では「書く速さを意識して書くこと」、「穂先の動きと点画のつながりを意識して書くこと」が加えられている。平成10年告示の学習指導要領にはなかったものだが、本来、文字を手書きするときには当然意識して書くべきものであった。これは平成29年告示の新しい学習指導要領においても同様に記述されている。単に点画の組み立てを正しく書くだけではなく、運筆という筆写能力の学習が加えられたことは、大きな前進であり、この学習活動を大いに推進したいものである。そして、書写の学習がその背景にある書道芸術の一部であるということを改めて認識することとなったのではないだろうか。

29年版小学校解説では、書写について次の説明がある。2 【知識及び技能】の内容 (3) 我が国の言語文化に関する事項の中で、

書写

書写に関する事項である。

ここに示す内容を理解し使うことを通して，各教科等の学習活動や日常生活に生かすことのできる書写の能力を育成することが重要となる。

文字のまとまった学習は，小学校入学を期に始まる。文字を書く基礎となる「姿勢」，「筆記具の持ち方」，「点画や一文字の書き方」，「筆順」などの事項から，「文字の集まりの書き方」に関する事項へと，内容を系統的に示している。さらに，文字や文字の集まりの書き方を基礎として，筆記具を選択し効果的に使用するなど，目的や状況に応じて書き方を判断して書くことについて示している。

なお，「第3 指導計画の作成と内容の取扱い」の2 (1) 力に示している書写の学習指導の配慮事項を踏まえる必要がある。

そして、2 (1) カは、次の通り。

カ 書写の指導については、第2の内容に定めるほか、次のとおり取り扱うこと。

(ア) 文字を正しく整えて書くことができるようにするとともに、書写の能力を学習や生活に役立てる態度を育てるよう配慮すること。

(イ) 硬筆を使用する書写の指導は各学年で行うこと。

(ウ) 毛筆を使用する書写の指導は第3学年以上の各学年で行い、各学年年間30単位時間程度を配当するとともに、毛筆を使用する書写の指導は硬筆による書写の能力の基礎を養うよう指導すること。

(エ) 第1学年及び第2学年の(3)のウの(イ)の指導については、適切に運筆する能力の向上につながるよう、指導を工夫すること。

今回、書写の学習指導が、第2の2内容の中の[知識及び技能]の「(3)我が国の言語文化に関する事項」のエに位置付けられた。これは現行の学習指導要領で「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」の(2)にあったものが「知識及び技能」の中に組み込まれたと考えてよいのだろう。

また、この度の新しい小学校学習指導要領では、「運筆する能力の向上」が、第3の内容の取扱いに加えられた。小学校第1学年及び第2学年の早い段階から、指導に工夫することとなっている。「学習指導要領解説」では、鉛筆などの硬筆による学習活動のほかに、「水書用筆」が一例としてあげられている。「水書用筆」は、墨を使わず水書きをするため、手や周囲を墨で汚すことなく、また水書板に書かれた文字は時間の経過とともに筆跡が消えるため、経済的に扱いが簡便である。また、鉛筆とは異なり、筆先が毛筆に近い弾力性に富むため、「筆圧」の変化を加えやすく、運筆の微妙な変化や動きをとらえやすいという特徴がある。第3学年以降の毛筆の学習指導へ円滑に移行できるとともに、運筆能力の習得には効果的な用具となろう。

次に、中学校学習指導要領に目を向けてみよう。中学校の書写では、漢字の行書とそれに調和する仮名が扱われている。中学校第1学年では「楷書」の学習に加えて「行書」の基礎的な書き方を、第2学年では「行書とそれに調和した仮名」を、そして第3学年では文字を効果的に書くという書写の総まとめが

進められており、これは平成 29 年告示の新しい学習指導要領でも同様である。速く書くことを目標に、おもに行書の習得が行われる。行書にしる仮名にしる、その書き方の特徴は、点画の「変化」「連続」「省略」であるので、先ほどの小学校書写にあった「筆圧」「書く速さ」「穂先の動き」「点画のつながり」の学習が生かされて初めて達成されるものである。

特に平成 29 年告示の学習指導要領の中学校第 3 学年の書写の記述はは次のとおり。

(ア) 身の回りの多様な表現を通して文字文化の豊かさに触れ、効果的に文字を書くこと。

「[知識及び技能]」に移されたが、平成 20 年告示のものとはほぼ同じ記述となっている。知識教育とのバランスをとりながら技能教育の強化が図られていくものと思われる。また、文字表現の多様性への理解、文字の文化についての方向性が示されたと考えたい。高等学校芸術書道への接続も示唆されているのではないだろうか。

中学校第 3 学年の書写の各社現行教科書の教材は次のとおり。毛筆硬筆ともに、漢語や漢詩句を書くのではなく、漢字仮名交じりの日常文を書く活動が行われている。

【教育出版】…「行書と仮名を調和させて書こう」「身のまわりの多様な文字に関心をもち、効果的に文字を書こう」など。実技毛筆手本は、半紙「創造」「旅立ちの朝」、書き初め「友好の精神」。

【光村図書】…「学習したことを生かして書こう」として、卒業を記念する作品を書く。実技毛筆手本は、半紙「輝ける未来へ」、書き初め「無限の可能性」。

【東京書籍】…「身近にある文字を調べよう」「効果的に書こう」「生活を豊かにしよう」などとして、漢字仮名交じりの日常文を効果的に書くという実用筆記重視となっている。実技毛筆手本は、半紙「栄光のかけ橋」、書き初め「希望に輝く春」。

高等学校の書道教科書を作成していない出版社ではあるが、次のとおり。

【学校図書】…「書写を生活に生かそう」として実用筆記重視。「作品を作ろう」などとして、作品制作と展示へつなげる。実技毛筆手本は、半紙「心のふ

れ合い」「全力を尽くす」、書き初め「大志を抱け」「旅立ちの春」。

【三省堂】…「効果的に書こう」「生活に生かそう」などとして卒業記念冊子を作る。毛筆手本は掲載無し。

なお、「文字の変遷」として、漢字の起源から五書体の変遷と我が国の平仮名、片仮名への流れの歴史が各社ともに図示されている。

中学校第3学年における「身の回りの文字」というのは、常用字体による印刷文字だけではなく、伝統的な書き文字、中国や日本に古来伝わってきた古典文字に対する理解、「筆写の楷書における書き方の習慣」による筆写体文字への理解を含むものと考えられる。

中学校卒業後の学校教育、社会教育の中での書写書道の学習への接続として、3学年の学習と「発展的な学習」の内容がそれに相当するだろう。

平成10年告示の学習指導要領は、週休二日制、学習内容三割削減という「ゆとり」教育が押し出されたものであった。この学習指導要領が平成14年度から順次実施されたものの、平成15年12月に一部改正が行われた。その一つが「学習指導要領に示しているすべての児童生徒に指導する内容等を確実に指導した上で、児童生徒の実態を踏まえ、学習指導要領に示していない内容を加えて指導することができることを明確にした」というものである。学習指導要領の範囲外の内容を学習することができるというもので、これにより、教科書では「発展的な学習」として学習内容が盛り込まれた。「ゆとり」教育の開始に一矢を報いたものだった。書写においては、中学校で学習する「行書」が小学校6年生の教科書にも扱われるようになった。

各社「発展」として掲出しているのは、中学校学習指導要領には示されていない学習内容であるが、高校書道での学習内容を含んでいる。

【教育出版】での発展は、

- 「気持ちのつながりから文字のつながりへ」…「元永本古今集」による連綿書の学習
- 日本建築と「書」…日常生活の中に見る書の様式に触れる
- 王羲之の行書を参考にして漢字仮名の言葉を書く
- 芸術としての書道「西本願寺本三十六人集」による仮名と料紙装飾について知る

【光村図書】での発展は、「先人の文字に学ぶ」として、楷書、行書、仮名の先人たちの筆跡を目にする機会が与えられている。具体的には、

- 漢字の書「蘭亭序」
- 仮名の書「高野切第三種」
- 「鍾繇」「虞世南」「顔真卿」「最澄」の楷書
- 「褚遂良」「黄庭堅」「趙之謙」「小野道風」の行書

【東京書籍】では、3 学年共通の資料のページが立てられ、その中で発展として、「古典から学ぼう」で、

- 中国唐時代の「四大家」の楷書「九成宮醴泉銘」「孔子廟堂碑」「雁塔聖教序」「自書告身」
- 王羲之の行書「蘭亭序」
- 平安時代の仮名古筆「蓬萊切」

を掲出。高等学校の書道教科書を作成していない出版社の場合、

【学校図書】での発展は、高校書道の教材を取り入れたものとなっている。

- 「九成宮醴泉銘」
- 「蘭亭序」
- 「臨書を体験しよう」
- 「篆刻を体験しよう」

【三省堂】での発展は、「書の名手たち」として、

- 「九成宮醴泉銘」
- 「風信帖」
- 「継色紙」

を掲載。

なお、中学校国語書写においても、「筆圧」「書く速さ」「穂先の動き」「点画のつながり」などの指導は、芸術書道へ接続するうえで大切な技能学習である。

書写学習の配当時間数は、小学校各学年で年間 30 単位時間、中学校 1・2 学年では年間各 20 単位時間程度、中学校 3 学年では 10 時間程度が配当されている。このように小学校から中学校まで書写学習の一連の体系が構築されてきた。

4. 高等学校芸術科書道の初期教育

小中学校の書写学習の体系が構築される中で、高校書道ではどのように書技をつなげていくとよいのであろうか。

小中学校においては、「音楽」「図画工作」「美術」といった教科の中でも高等学校芸術教科「音楽」「美術」「工芸」と同じように、「表現及び鑑賞の活動」が行われてきている。一方、文字を書くことについては、国語教科の中で漢字の表記（書字）や書写という中で、「表現及び鑑賞の活動」は行われてこなかった。高等学校芸術書道は、文字の芸術表現と鑑賞の本格的な学習の始まりと言っ

てよいだろう。

平成 21 年告示の高等学校芸術教科全体の目標は次のとおり。

芸術の幅広い活動を通して、生涯にわたり芸術を愛好する心情を育てるとともに、感性を高め、芸術の諸能力を伸ばし、芸術文化についての理解を深め、豊かな情操を養う。

その中で、高等学校芸術科「書道」の目標は次のとおり。

書道の幅広い活動を通して、生涯にわたり書を愛好する心情を育てるとともに、感性を高め、書写能力の向上を図り、表現と鑑賞の基礎的な能力を伸ばし、書の伝統と文化についての理解を深める。

書道の学習指導要領の内容は他の芸術科目と同様「A 表現」と「B 鑑賞」に分かれる。「A 表現」の中に「(1) 漢字仮名交じりの書」「(2) 漢字の書」「(3) 仮名の書」の 3 つがあり、書道ではすべて必修となっている。後述するように、「漢字仮名交じりの書」は書道初期教育では重要な役割を持つ。

B「鑑賞」については次のとおり。

鑑賞に関して、次の事項を指導する。

ア 日常生活における書への関心を高め、その効用を理解すること。

イ 見ることを楽しみ、書の美しさと表現効果を味わい、感じ取ること。

ウ 日本及び中国等の文字と書の伝統と文化について理解すること。工漢字の書体の変遷，仮名の成立等を理解すること。

先に述べた中学校第3学年の「身の周りの文字」への関心と接続している。
また、3 内容の取扱いは次のとおり。

- (1) 内容のA及びBの指導に当たっては、相互の関連を図るものとする。
- (2) 内容のAの指導に当たっては、(1)の漢字は楷書及び行書、仮名は平仮名及び片仮名、(2)は楷書及び行書、(3)は平仮名、片仮名及び変体仮名を扱うものとし、(2)については、生徒の特性等を考慮し、草書、隸書及び篆書を加えることもできる。
- (3) 内容のAの指導に当たっては、中学校国語科の書写との関連を十分に考慮し、日常生活における目的や用途に応じて、硬筆も取り上げるものとする。

「中学校国語科の書写との関連」に対する考慮とあるのは、実用筆記との関連であると同時に、「筆圧」「書く速さ」「穂先の動き」「点画のつながり」などの行書の学習との関連を指しているものと考ええる。

現在、高等学校書道の教科書は、【教育出版】【光村図書】【東京書籍】【教育図書】があり、各社ともに書道 において書道芸術への導入教材のページに工夫を凝らしている。主に次の3点であろう。

芸術への理解

毛筆と紙墨の特性による表現の多様性

漢字仮名交じり文を題材とすることにより書道を身近に感じる

高校書道では、国語科で扱うところの常用漢字の書き方について理解することが重要であると同時に、古典文字を扱う。書道の初期教育では、漢字の学習にあった「文字を正しく整えて書く」ことに加えて、まず伝統文化としての書字、文字の芸術性に触れること、それが「書道芸術」であるということを知ることが第一である。そして、文字を書くということは日常生活の中での一つの文化であり、姿勢・執筆（筆記具の持ち方）・筆圧「書く速さ」「穂先の動き」「点画のつながり」といった筆使いなどの大切さに今一度気付くことである。

書道の芸術性を生んだのがその柔らかい毛筆であり、にじみやかすれを表出する紙墨である。墨色の変化や味わいを作るのが磨墨するための硯である。そういった「用具用材の違いによる表現」の多様性を知ることが第二である。そして、これらを達成するために身近で日常的な言葉や漢字仮名交じりの詩文を題材として取り上げることが効果的である。これが第三である。身の回りの書に興味関心を持つことで「書を愛好する心情を育てる」ことができるのだろう。

5. おわりに

『常用漢字表の字体・字形に関する指針』（平成 28 年 2016 年）により、常用漢字に対する考え方と書き方が整えられ、学習指導要領も改定を見た。中学校国語科書写が社会生活の中で大きな役割があることも述べた。『教育基本法』の改正（平成 18 年 2006 年）による「伝統文化の尊重」もあり、行書の学習に加えて、特に中学第 3 学年において、「発展」学習ではあるが、身の回りの文字として古典文字を通じた表現と鑑賞の学習が行われることは意義深い。文字文化、芸術としての書道を理解し、書写から書道への円滑な接続を願うものである。

（文学部言語表現）